

タイトル	笠女郎の歌 : 譬喩歌三首
著者	小野寺, 静子; ONODERA, Seiko
引用	北海学園大学人文論集(48): 154-142
発行日	2011-03-31

# 笠女郎の歌

## ——譬喩歌三首——

### はじめに

笠女郎は生没年未詳、系譜も未詳だが、「笠」とあるところから笠朝臣家の人であろう。大伴家持との贈答歌をめぐって対象的な位置づけがされる紀女郎のように、万葉集にその名、父、結婚相手が記されることもなく、経歴もはっきりしない。万葉集中の歌から、宮仕えのためか都にいたが後年故郷に戻ったことがわかる。万葉集には二九首の歌を残すが、すべて大伴家持へ贈った恋の歌である。笠女郎の家持に対する思いは並々ならぬものを感じさせるが、二人の恋はいかなるものであったかは、歌によって推測するほかない。

笠氏の中で笠女郎と血縁関係にある人として注目されるのは、笠朝臣御室と笠朝臣麻呂である。御室は養老四年三月四日、

### 小野寺 静 子

大伴旅人が征隼人持節大將軍となつた時、巨勢朝臣真人とともに副將軍に任命され、八月に旅人が京へ召喚された後も任にあたり養老五年七月七日還帰している。麻呂は養老五年五月一二日、太上天皇（元明）の病氣平癒の爲に出家し満誓と名乗り、養老七年二月二日造筑紫觀世音寺の別当となり大宰府に赴き觀世音寺の建立にあつた。後に大宰帥となつた旅人と交流を持つことになる。万葉集中の満誓の歌七首のうち三首は（三・三三六、三五二、五・八二二）、旅人の大宰帥時代のもので旅人を中心にした宴の歌である。他の二首は、卷三譬喩歌に収められるが（三・三九一、三九三）、これも旅人の大宰帥時代のものといえる。卷四の、旅人上京後、満誓が旅人に贈つた歌とそれに和した旅人の歌、

大宰帥大伴脚の京に上りし後に、沙弥満誓、脚に贈る歌二首

まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ

(四・五七二)

ぬばたまの黒髪変はり白けても痛き恋にはあふ時ありけり

(四・五七三)

大納言大伴脚の和ふる歌二首

ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしある

らし

草香江の入江にあさる葦鶴のあなたづたづし友なしにして

(四・五七五)

は、旅人と満誓が大宰府で親密であったことを示す。満誓は上京した旅人に向かって残された寂しさを歌い、それに和える旅人の「友なしにして」からは、満誓に対して山上憶良とは異なった親密さや友情を抱いていたことがわかる。

満誓の歌は巻五には「梅花の宴」での一首のみ収め、それ以外は巻三、四に収められる。旅人の大宰帥時代の歌は巻五に収められるものと巻五以外に収められるものに大別できる。巻五は帥としての交流によって生まれた作品群が主たるもので、巻五以外の歌は旅人と個人的な交流を土台にして歌われたもので

(二四)

あろう。満誓は巻五には梅花の宴歌以外なく巻五形成者とはいえない。

大宰帥時代、旅人は満誓に心を開いていたのであり、旅人を通しての大伴氏との交流ということであれば、武人的な性格の強い御室よりも満誓の方がより親密であったことが推測できる。笠女郎と血縁関係ないしは近い親族関係にあるのは、満誓のほうだろう。事実そうした言及も見られる。ここでは、そうした指摘もふまえながら、笠女郎の巻三に収められる譬喩歌三首について考え、笠女郎の歌の中でこの三首はどう位置づけることができるのかを考えていきたい。

### 一 巻三「譬喩歌」

伊藤博氏はかつて、

現存巻三・四は、拾遺歌巻に奈良朝の今歌を増補して、「古今倭歌集」を形成させたとき、「相聞」を別に独立させ、その空地へ「譬喩歌」を新設することによって生誕したものである<sup>(1)</sup>。

と述べたが、この見解は今に至るまでほぼ踏襲されている。伊藤氏はさらに、譬喩歌を新設したのは家持であり、それは原本

卷三・四を解体し「増補を行なった操作の一環として起つたもの」<sup>(2)</sup>で、「相聞」〈挽歌〉によって成る『原本巻四』を想定<sup>(3)</sup>した。卷三の譬喩歌は卷四の相聞から選出されたものということになる。小野寛氏は卷三譬喩歌は卷四の配列順と大体対応していることも示し、<sup>(4)</sup>卷四からのものを更に補強する。笠女郎の歌は卷四に「笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌二十四首」<sup>(5)</sup>（五八七〜六一〇）としてまとめて載っている。この歌群の中から選出され卷三に譬喩歌として採録されたことになる。こうした考えは、卷三「譬喩歌の部立が、卷四相聞を一巻として別立てにした際に新設されたものであり、<sup>(5)</sup>時々贈られてきた歌の中に含まれていたものを、卷三の譬喩歌の部を立てる際に、家持の選んだもの」<sup>(6)</sup>で、卷三に「譬喩歌」部を設けるにあたってそれらしい歌を選び、ある程度の形をなそうとした苦心の末の撰歌なのであろう、として受け継がれている。

卷三譬喩歌は冒頭に紀皇女の歌を載せたあととは造筑紫観世音別当沙弥满誓、大宰大監大伴宿祢百代、余明軍の歌と続き、そのあととは、家持に贈る笠女郎の歌をはじめとして大伴・佐伯の人たち及びその周辺の人々の歌が載る。これらはおそらく家持によって集められ、卷四相聞の歌群とほぼ同じ歌群によって分類されたのであろう。

譬喩歌は「寄物陳思」の「傾向を更に進め隠喩にまで達した」<sup>(7)</sup>もので、内容的には相聞である。卷四相聞でなく卷三譬喩歌に収められるのはそれらの歌が隠喩・寓喩の歌、あるいは編者がそう認めたからである。が卷四に卷三譬喩歌のような表現の歌はないかといえそうといえず、「赤駒の越ゆる馬柵の標結ひし妹が心は疑ひもなし」<sup>(8)</sup>（四・五三〇、聖武天皇）「標結ひしえ」<sup>(9)</sup>、「山菅の実成らぬことを我に寄そり言はれし君は誰とか寝らむ」<sup>(10)</sup>（四・五六四、坂上郎女）「実成らぬ」は実体のないことの譬え<sup>(11)</sup>、「初花の散るべきものを人言の繁きによりてよとむころかも」<sup>(12)</sup>（四・六三〇、佐伯赤麻呂）「初花の散るべきものを」はうら若い女性が結ばれることの譬え<sup>(13)</sup>、「世間の女にしあらば我が渡る痛背の川を渡りかねめや」<sup>(14)</sup>（四・六四三、紀女郎）「我が渡る痛背の川を渡りかねめや」は禁断の恋などの寓喩<sup>(15)</sup>などと認めることはできる。特に、

大伴宿祢家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも  
 も  
 夢のごと思ほゆるかもはしきやし君が使ひのまねく通へば  
 うら若み花咲きかたき梅を植ゑて人の言しみ思ひそ我がす  
 る

（四・七八六）  
 （四・七七七）  
 （四・七八八）

また家持、藤原朝臣久須麻呂に贈る歌二首

心ぐく思ほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば

(四・七八九)

春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまにまに

(四・七九〇)

藤原朝臣久須麻呂の来報ふる歌二首

奥山の岩陰に生ふる菅の根のねもころ我も相思はざれや

(四・七九一)

春雨を待つとにしあらし我がやどの若木の梅もいまだ含め

(四・七九二)

の七八六、七八八、七九二歌は卷三譬喻歌に載せるべきものといつてよい。しかし他の歌とともに家持と久須麻呂との報贈歌群中のものであるから、ばらばらにするのでなくまとめて卷四に載せたということであろう。卷三譬喻歌に収められる場合、それが贈答歌群中にある場合、いかに譬喻歌といえるものでもそこから抜き出して卷三譬喻歌に収めるようなことはしないで、他の歌とからむことのない単独の歌、ないしは両者ともに譬喻歌と認められるものが卷三の譬喻歌に収録されたようである。贈答歌群中の歌であったものを抜き出して載せた可能性がないとはいえないが、その場合は他の返歌と切り離すことが可

能な場合であろう。

笠女郎の歌は万葉集に二九首収められる。この歌数は女性の歌人としては坂上郎女の八四首に次々多きである。しかもその全てが大伴家持へ贈った歌である。笠女郎の歌は卷三譬喻歌に三首、卷四相聞に二四首、卷八春相聞に一首、秋相聞に一首あり、その全てが家持への恋情に彩られたものである。この中の卷四の二四首は、「笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌二十四首」(五八七〜六一〇)と一まとめとなっていて、その収載の姿も特異である。この二四首が何度かにわたって家持に贈られたものであることは明らかであり、またこうした収載例は坂上大嬢と「離絶数年、また逢ひて相聞往来」した後の「更に大伴宿禰家持、坂上大嬢に贈る歌十五首」(四七四〜七五五)などに認められるが、これとて一まとめになつてゐるものではない。

譬喻歌という部立は卷三、七、十、十一、十三、十四にあるが、卷三に二五首(三九〇〜四一四)、卷七に一〇八首(二九六〜四〇三)、卷十に三首(二八八九、一九七八、二〇〇九)、卷十一に一三首(二八二八〜二八四〇)、卷十三に一首(三三三三)、卷十四に一四首(三四二九〜三五七六、三五七二〜三五七六)の計一六四首の歌がある。ただし、卷七・一三七五歌には「右の一首、譬喻の類にあらず。ただし、闇の夜の歌人の所心の故に、並にこの歌を作る。

よりて、この歌を以て、この次に載す」の左注があり、譬喩歌である一三七四歌に続けて作られた歌であるが、一三七五歌は譬喩歌ではないという編者の見解を載せる。確かに一三七五歌は譬喩歌とは言い難いから巻七の譬喩歌は一〇七首となるが、同様な例は他にもあり巻七の実質的な意味での譬喩歌が何首であるかは明確にしがたい。また、万葉集中には譬喩歌に分類されていなが譬喩歌とみなしうるものが多数あり（巻二・一〇一、一五八、一六九、巻四・七八六、七九二、巻十・一九〇三、二二八四、巻十一・二七〇九等）、これらを合わせると譬喩歌は三大部立に次ぐ数になる。

譬喩歌は、内容的には相聞歌と同じである。巻三は雑歌一五八首、挽歌六九首のなかにあつて譬喩歌は二五首と少ないが、巻三を雑歌、相聞、挽歌の三大部立に仕立て上げようとした計らいによって選出された歌群である。こうした巻三譬喩歌に収められた笠女郎の譬喩歌三首は、どのような事情のもとに巻三譬喩歌部を形成する歌群として選びとられたのであろうか。具体的に歌をみることによって考えたい。

## 二 三九五歌

巻三譬喩歌に収められる笠女郎の歌は次のとおりである。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首

託馬野つくまのに生おふる紫草衣むらさきぎぬに染しめいまだ着きずして色いろに出いでにけ

り （三・三九五）

陸奥むろくのの真野まのの草原くさほら遠とほけども面影おもかげにして見ゆといふものを

（三・三九六）

奥山おくやまの岩本いはもと菅すげを根深ねこほめて結びし心忘れかねつも （三・三九七）

三九五歌の「託馬野に生ふる紫草衣に染め」は、

韓人の衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも

（四・五六九、大典麻田連陽春）

紅に深く染みにし心かも奈良の都に年の経ぬべき

（六・一〇四四、作者不審）

肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘れめや

（十一・二四九六、作者未詳）

紅の深染めの衣色深く染みにしかばか忘れかねつる

（十一・二六二四、作者未詳）

紅に染めてし衣雨降りてにほひはすともうつろはめやも

（十六・三八七七、作者未詳）

の、紫・紅などに染めることを譬喩とする表現と同じで、衣に染まった紫の色のようにあなたが心に染み込んで(五六九)、紅色に深く染まったような旧都への思い(二〇四四)、紅色に色濃く染めた衣のようにあなたが染み込んだ心(二六二四)、紅に染めた衣のようにあなたを心に染み込ませた(三八七七)、額髪を結んだ木綿の染めのようにあなたを心に染み込ませた心(二四九六)のように、相手や旧都を心に深く刻み思うことの譬喩として用いられる。三九五歌は笠女郎が家持のことを深く思うようになったことを譬えている。紫の色が持ち出されるのは、紫が高貴な人が身につけることができる色であることにより家持の高貴さをあらわす。紫色の持つ高貴なイメージが家持を擬するにふさわしいが、「名門の貴公子家持と身分の隔たりをあらわしている」<sup>(9)</sup>、「暗に家持が近づき難い高貴な方ということも寓意している」といえる。

「いまだ着ずして」の「着ず」は相聞の譬喩としては、  
今作る斑の衣面影に我に思ほゆいまだ着ねども

(七・二九六、衣に寄する)

住吉の浅沢小野のかきつはた衣に摺り付け着む日知らずも

(七・一三六一、花に寄する)

三島菅いまだ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠

(二一八)

がある。斑の衣をまだ着ていないとはまだ相手とは結ばれていないこと(二九六)、かきつはたを摺りつけ染めた衣はいつ着られるかわからないとは、恋い慕っている人にいつになつたら接することができかわからないこと(三六二)、菅笠をかぶらないとは自分とは結婚に至らないこと(二八三六)を譬えることを考えると、「いまだ着ずして」から笠女郎は家持とはまだ結ばれていないことを歌っていることになる。この歌は笠女郎と「家持との関係は未ださう深いものではない時期の歌」、「貴公子家持を思いそめてから、手も触れないのに顔色に現れてしまった」<sup>(11)</sup>ころの歌ということになる。笠女郎と家持の接点はあつて、笠女郎が深く家持を思うものの、二人の共通の思いに至っていない時期の歌といえるが、この歌が家持に贈られていることを考えれば、家持に何も思い当たるものがないわけではあるまい。二人がそういう段階にあつた歌である。

初句「託馬野」は「ツクマノ」と訓まれ、卷十三譬喩歌部の「師名立 都久麻左野方 息長之 遠智能小菅」(三三三三)の例によつて「息長」の所在地、近江国坂田郡筑摩と考えられてきた。これに対して講義(山田)が「託」を「ツク」とよむ例は万葉集にはない、地名は主として音をあてるので「タクマ」「タ

カマ」とよむべきである、和名鈔の地名と延喜式の「交易雜物」の紫草を産する国名を照らし合わせると「恐らくは肥後国託麻郡にあらざるか」、次の歌の「陸奥の真野」（東）に対して九州（西）の歌を載せた、等から訓みと場所に新見を出した。近年の注釈書でもこれを踏襲するものもある。<sup>(12)</sup>

全注では、

笠女郎を沙弥满誓の一族として考えると、家持と满誓は大宰府にいたことがあり、託馬野の紫草のことはよく知っていたのであり、笠女郎も满誓から紫草のことを聞いていたとすると、笠女郎が紫草を選んだ理由も納得できるし、ますますこの託馬野は肥後であるのがふさわしいと思う。と積極的に肥後国を支持し、笠女郎の出自に結びつけている。

紫・紅などに染めることを譬喩とする表現として先にあげた五例中三例が紅で、紫は大典麻田連陽春の「大宰帥大伴連、大納言に任せられ、京に入らむとする時に、府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に餞する歌」（四・五六九）のみであった。小野氏は、この種の譬喩歌が紅染めの衣を素材とするのに、「笠女郎は『紅』を『紫』にすることによって、譬喩一般の常識をひっくり返し<sup>(13)</sup>」と述べているが、この発想は旅人の大宰帥時代すで見えていたものであった。笠女郎と筑紫についてはすでに

神堀氏が「彼女と筑紫との関連は意外に密であり、したがって、沙弥满誓と彼女とのつながりもまた強いという想定が深まると思<sup>(14)</sup>」と指摘することではある。そう考えると、家持が大宰府時代に知り合った满誓の口添えによって、帰京後满誓と血縁関係にある笠女郎に歌を贈り、それにこたえた笠女郎の歌で、小野氏は「この歌は笠女郎の家持への第一首ではないだろうか<sup>(15)</sup>」としている。笠女郎の歌はすでに譬喩歌の手法をとりいれながらも独創性をあらわしている。独創性という点では井出至氏は「衣」と「着る」とを縁語として用いた歌の多くは男の立場での作であるが、ここでは女性であることを指摘している。<sup>(16)</sup>

### 三 三九六歌

三九六歌は譬喩歌として、どのようなことを譬えているのだろうか。契沖は「哥ノ意ハ、真野ノカヤ原ノ遠キモ一タヒ見テ面白シト思ヒツレハ、面影トナリテ見ユル如ク逢見ヌ中ノ遙ケサモ真野ハカリナレト、一タヒ見シヨリ忘ラレヌトナリ」と述べ、講義、注釈などがこれに続く。これは、「真野の草原が面影に立つならば、思ふ人の姿が面影に立たぬわけがない<sup>(18)</sup>」と読む大方の解釈のように、近くにいっても面影にもみえない、会えない

い嘆きを寓した歌とすべきであろう。近くにいても、ということとを強調するために遠くの「陸奥の真野の草原」が引き合いに出されるのだが、何故「陸奥の真野の草原」なのか疑問である。歌枕的地名として当時から知られていたところといわれるが、

この歌が作られたころ「陸奥の真野の草原」が歌枕的な地であったという確証はない。そのため「ミチノクにある野の萱原といふ意で、地名でもないかもしれぬ」という解釈や、蝦夷征伐に出動した大伴氏の門流から「陸奥の真野の草原」のことを家持が聞き、それを笠女郎に伝えた故の歌語とする見解もある。

「陸奥の真野の草原」は遠いものの象徴として歌われ、近くにいる家持は面影にも現れない、ましてや直の逢いのかなわなないことを嘆いている。「面影」の「オモ」は「人の顔、または物の表面<sup>(2)</sup>」を意味するが、駒木敏氏は「この語が主として人の顔容の幻影を意味することはいうまでもない。ただ、その中で、次のような例が本歌に関して注意される」として、「今月十五日に部下加賀郡の境に到来す。面蔭に射水の郷を見、恋緒深見村に結ぼほる」(十八・四一三三前文、大伴池主)や「今作る斑の衣面影に我に思ほゆいまだ着ねども」(七・二二九六、衣に寄す、人麻呂歌集)の例から「相手を比喻する媒材としての景物」に関して用いられることを指摘している<sup>(20)</sup>。

(110)

二人の関係がどの段階にあつて「面影」があらわれるかは個々によつて異なるだろう。

立ち変はり月重なりて逢はねどもさね忘れえず面影にして  
(九・一七九四、福麻呂歌集)

は「娘子を思ひて作る歌一首」(九・七九二)の反歌である。長歌ともう一首の反歌から推すと、「娘子」と「我」はすでに結ばれた仲であるが「垣ほなす人の横言繁」(二七九三)が故に逢わない日が幾月も重なり、その果てに少しも忘れられず面影に見えてくるというものである。こうした自分たちの意思でなく、なんらかの事情、障害によつて相愛の二人が会えず思いが募り面影に見えるものとしては次のようなものがある。

里遠み恋ひわびにけりませ鏡面影去らず夢に見えこそ

(十一・二六三四、作者未詳)

は、恋仲の関係にあつて互いの里が遠いのでなかなか逢えない故に夢に面影が見えてほしい、という歌である。

遠くあれば姿は見えず常のごと妹が笑まひは面影にして

(十二・三三三七、作者未詳、羈旅にして思ひを発す)

年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹し面影に見ゆ

(十二・三三三八、作者未詳、羈旅にして思ひを発す)

二首は旅中にあり長く遠く離れていて、「妹」を面影に見、また、

しきたへの衣手離れて我を待つとあるらむ児らは面影に見  
ゆ （十一・二六〇七、作者未詳）

も何らかの事情で、逢えずにいる「児」が面影になってあらわ  
れるという歌である。

右のような物理的事情や邪魔立てするような表現は直接見当  
たらないが、

燈火のかけにかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ

（十一・二六四二、作者未詳）

我妹子が笑まひ眉引き面影にかかりてもと思ほゆるかも

（十一・二九〇〇、作者未詳）

は、相愛の、あるいは相愛だった「我妹子」を面影にみる歌で、  
面影は二人の結びつきに裏打ちされた場合の表現である。

家持歌の「面影」は、

かくばかり面影のみに思ほえはいかにかもせむ人目繁くて

（四・七五二）

夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に

見ゆ （四・七五四）

高円の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

（八・一六三〇）

の三例あるが、いずれも「離絶数年、また逢ひて相聞往来」し

た後の坂上大嬢への歌である。まもなく二人は結婚に至る相聞  
往来中の作である。

「面影」は他に卷十九・四二二〇歌の例があるが、これは坂上  
郎女が越中国にいる娘・坂上大嬢を面影に見るというものであ  
り相聞歌とは言えないが、遠く離れているらしい人の面影で  
ある点は他例に通ずる。<sup>(23)</sup>

こうしてみると、「面影」という語は男女の懇意な仲に裏打ち  
された相手への強い思いが何らかの事情によって逢えない時、  
「面影」となって表れるもの、ということになろう。鈴木日出男  
氏は三九六歌に対して、

唐突な地名を詠みこむことが、ここでは単なる比喩の語法  
を超えて、忘れえない切実さと二人を隔てている絶望的な  
心の距離が髣髴させられている。<sup>(24)</sup>

と述べているが、この時期笠女郎と家持はすでに結ばれていて、  
しかし、家持は自分のところに訪れるわけでもない。結句「も  
のを」の余韻にこめられた笠女郎の願望と失望は大きい。

#### 四 三九七歌

三九七歌は、近年の注釈書でいえば、

①「奥山の岩本菅を」が「根深めて」の序詞(全歌講義)。

②「奥山の岩本菅を」が「根深めて」以下を導く序詞。押シ臥スと結ブの二動作にかかる(全注)。

③「奥山の岩本菅を根深めて」が「結びし」の序(私注)。

④「奥山の岩本菅を根深めて結びし心」までが譬喩(和歌大系)。

四通りの捉え方がある。序詞とすると「奥山の岩本菅を」と、格助詞「を」で終わることになるがそれは適切でなく、この歌が譬喩歌に収められていることから④の解釈が適切で編纂の意図にもかなっているように。

「奥山の岩本菅を根深めて結びし心」とはどのような心を譬えているのだろうか。「奥山」は、奥深い山のこと、「神を祭る歌」に(三・三七九〜三八〇、坂上郎女「奥山のさかきの枝に」とあるのは神祭りの道具としてふさわしい山奥の神聖な場から取ってきた榊の枝のことである。また「奥山の」が「真木」の枕詞となるのも奥山に生える木の総称として「真木」にかかるのであり、「奥山」には神聖、清浄、人里はなれたという意味がある。三九七歌では「奥山の岩本菅」が登場するが「菅」は特に奥山にしか生えないものではない。「奥山の」を冠することによって「岩本菅」が人里離れた所にある、清浄なイメージをもつことにな

(三二)

る。家持と笠女郎が結んだ心は、清浄な心よりのものであったことを、この語によって強調している。

「菅」の根は地中深く入り込み長い。そこから根が深いという表現が出てくるのだが、すでに諸注釈書で指摘されるように、この歌の上三句は、

奥山の岩本菅の根深くも思ほゆるかも我が思ひ妻は

(十一・二七六一、作者未詳)

と類似している。しかし、この歌は「奥山の岩本菅の」と、菅の根の深いことから「根深く」を起こす比喩の序詞となっている。「……菅の」、「……菅の根の」と、「の」の比喩によって「深し」を起こす序詞を形成するのが通常であるから、一般的な歌い方である。三九七歌のように「岩本菅を」と「を」に続くという点でいうと、

あしひきの岩根ごこしみ菅の根を引かば難みと標のみそ結  
ふ (三・四一四、大伴家持)

のほうが近い。四一四歌は「大伴宿称家持の歌一首」として、巻三譬喩歌の最後に載る。新大系では三九七歌に対して四一四歌に「答えたような歌である」と述べている。その是非のほどはわからないが、笠女郎が清らかな心で深く私たちが結んだ心は忘れられません、と贈ってきたのに対して家持が、「反対が

あつて妻にすることが困難なので、二人だけの約束ですませて  
いる<sup>(25)</sup>」といった歌を贈ってきたのだとしたら、二人の関係性が  
推測でき、万葉集に残る二人の歌がアンバランスであるのも納  
得がいく気がする。しかし、これはあくまでも推測に過ぎない。

「かぬ」は、

未来を期待する意が生じ、期待が実現にまで至らないとこ  
ろに不能の意があらわれたものではあるまいか。「不勝」「不  
得」などの文字から、実現を期して努力しつつ至らない意  
を表わすという意識をみることはできる<sup>(26)</sup>。

という意味をもつ。笠女郎は清らかな心でねんごろに家持と結  
ばれた。その関係が長く続くことを期待し努力を惜しまなかつ  
たが実現に至らず、「結びし心」を忘れたくとも忘れられないで  
います、と訴えた歌である。笠女郎と家持との初期の歌という  
より、結ばれながらも続くことがかなわない状況にある歌であ  
る。

### おわりに

巻三譬喩歌の笠女郎の歌は、家持との交際のどの時期に置く  
ことができるのだろうか。三九五歌は初期の歌として、ほぼ異

論はない。三九六歌は三九五歌と全く同時というわけではない  
が、恋のはじまりのもの<sup>(27)</sup>、三九七歌についても初期のものとの  
とらえかたがあり、三首は共に巻四に見える二四首よりも前、  
家持との恋のごく初期の作と考えられるという指摘がある。し  
かし、三九七歌は「かなり後の段階の歌<sup>(28)</sup>」、「恋愛の初期の詠歌  
とは認めがたいと思う<sup>(30)</sup>」の指摘があるように、初期のものとは言  
いがたい。

三九六歌の面影は相愛の二人という深い関係があつてこそ見  
えるものである。しかし二人の結びつきはあつても面影に見え  
ることのない自分の恋、相愛でない恋への思い、三九七歌は神  
聖な清浄な心で結ばれたにもかかわらず、長くと願う思いは報  
われず、忘れられずにいる、これらの歌が初期のものとは言い  
がたいであろう。それぞれに時間の隔たりがある。これら三首  
を巻四の二四首のどこに位置づけるかは、巻四の二四首の考察  
を経ておこなうものであろう。

釈注は、笠女郎の「譬喩歌」三首は、いずれも植物を媒体と  
し二人の出会いから順を追って作られた歌が配置されていて、  
「三首は一組」であり、「第一首は契りを結ぶ前の恋、第二首は近  
くて遠い恋、第三首は契りを結んだのちの恋をうたったもので、  
恋を三種の状態に分けて譬喩に託したところに手腕も眼目もあ

るのがこの三首なのである」と指摘する。たしかにここには譬喩歌三首がみごとに編集されている、というべきであろう。家持は笠女郎が贈ってきた歌々から譬喩歌を選び取り、時系列的に並べ、笠女郎の譬喩歌としてまとめあげた。家持の手腕であるが、家持の笠女郎への思いとは裏腹に笠女郎の歌への愛着があらわれている。

注

- (1) 伊藤博「卷三以下の『近つ世』の歌」『万葉集の構造と成立』上 昭和四九年九月 塙書房
- (2) 伊藤博「譬喩歌」の構造―卷三・四の論―『万葉集の構造と成立』上 昭和四九年九月 塙書房
- (3) 注2中の注(1)による
- (4) 「笠女郎の譬喩歌と季節歌―その歌群への位置づけ―」『論集上代文学』第五冊 昭和五〇年一月 笠間書院
- (5) 和歌大系一「万葉集への案内」
- (6) 稲岡耕二「笠女郎の譬喩歌」『明日香』47―1 昭和五七年一月
- (7) 新編全集一 解説「部立と歌教」
- (8) 全歌講義
- (9) 原田貞義「古典散策 託馬野に 生ふる紫 衣に染め」『藝林』72―11

(三四)

- 平成二年一月
- (10) 尾山篤二郎「大伴家持の往来歌」『大伴家持の研究』昭和三二年四月。小野寛 注4に同じ
- (11) 新編全集
- (12) 【増訂】全注釈、評釈(窪田)、注釈(沢瀉)、全注
- (13) 小野寛 注4に同じ
- (14) 神堀忍「笠女郎 幻影の恋に身を焼く」『国文学』24―4 昭和五四年三月
- (15) 大久間喜一郎他編『万葉集歌人事典』「笠女郎」の項。昭和五七年三月 雄山閣
- (16) 井手至「譬喩歌と縁語」『万葉集研究』第三集 昭和四九年六月
- (17) 代匠記(精撰本)
- (18) 注釈(沢瀉)
- (19) 私注
- (20) 評釈(金子)
- (21) 『時代別国語大辞典 上代編』昭和四二年一月 三省堂
- (22) 駒木敏「笠女郎の相聞歌『面影にして見ゆといふものを』」『万葉の歌人と作品』十巻 平成一六年一〇月
- (23) 一二九六歌は唯一、まだ結ばれないものが面影にみえるというものである。
- (24) 鈴木日出男「哀愁の女―笠女郎―」『国文学』20―16 昭和五〇年一二月

- (25) 釈注
- (26) 注21に同じ
- (27) 注4に同じ
- (28) 全歌講義
- (29) 注6に同じ
- (30) 注22に同じ

付記

論中の万葉集は、『萬葉集 訳文篇』埴書房によった。

本文中に引用した注釈書は次のように省略して記した。

代匠記（精選本） 契沖『代匠記精選本』 元禄三年

評釈（金子） 金子元臣『万葉集評釈』 昭和一〇〜二〇年

講義（山田） 山田孝雄『万葉集講義』 卷第三、昭和十二年一月

評釈（窪田） 窪田空穂『万葉集評釈』 昭和一八〜二八年

私注 土屋文明『万葉集私注』 昭和二四〜三一年

【増訂】全注釈 武田祐吉『増訂 万葉集全注釈』 昭和三一〜三二年

注釈（沢瀉） 沢瀉久孝『万葉集注釈』 昭和三二〜五二年

全注 木下正俊『万葉集全注 卷第四』 昭和五年 有斐閣

釈注 伊藤博『万葉集釈注』 一九九四〜一九九六年 集英社

新編全集 【新編】日本古典文学全集 万葉集 一九九五年四月〜一

九九九年八月

和歌大系 『和歌文学大系 万葉集』 平成九年〜  
全歌講義 阿蘇瑞枝『萬葉集 全歌講義』 二〇〇六年三月〜